

本妙寺を訪ねて

古作 登 (大阪商業大アミュージメント産業研究所主任研究員)

昨年暮れに東京・巣鴨の本妙寺(法華宗陣門流)を訪問した。この寺は室町時代末期に徳川家康の家臣が遠江国(現在の静岡県西部)に創建したのが始まりで、豊臣秀吉によって家康が関東に移されると本妙寺も江戸城の中に移転した。

第28回

その後も江戸時代初期は各地を転々とし、小石川のちに本郷丸山に移る。1657(明暦3)年に起きた「明暦の大火」により焼失するも再建、1910(明治43)年から現在の場所となった。

寺内には時代劇「遠山の金さん」で有名な遠山左衛門尉景元の墓や、将棋で実力十三段・棋聖と呼ばれた天野宗歩の墓があるが、囲碁ファンにとっては歴代本因坊の墓が多くあることで有名だ。

道策、秀伯、伯元、察元、烈元、丈和、秀策らの墓石が並ぶ一角の中央に位置するのは、最後の世襲制本因坊となった二十一世本因坊秀哉(1874~1940)の墓だ。

秀哉は1938(昭和13)年の引退に際し、本因坊の名跡を実力制のタイトル称号として日本棋院に譲った。タイトル戦としての本因坊戦は1939年に開始され、1941年、第1期本因坊の座に就いたのは関



本妙寺にある歴代本因坊の墓所

山利一六段(当時)。関山は本因坊利仙と号した。これを端緒に戦後、タイトル戦は増え続け現在の棋界隆盛につながる。

毎年、秀哉の命日にあたる1月18日には本妙寺で先人の遺徳をしのび囲碁界の発展を祈念する「秀哉忌」が営まれている。